平成23年度大学コンソーシアムとちぎ「大学を超えた共同研究支援事業」報告書

所属機関名	作新学院大学女子短期大学部
団体・グループ等名	とちぎ学研究会・大学教育技術研究グループ
研究代表者名 (所属部署)	西田 直樹 (作新学院大学女子短期大学部 幼児教育科 教授)
研究連携担当者名及び連絡先	・橋立達夫 (作新学院大学 教授) ・増山正明 (足利工業大学 教授)
研究連携校名	・作新学院大学 ・足利工業大学 ・作新学院大学女子短期大学部
関連自治体・経済団体等名	

1. 研究事業名	「とちぎ学」(地域学)の教育プログラムの創出事業
2. 実施年度	平成23・24年度
3. 研究成果等	<p>「学校」という護られた環境の中で成長して来た大学生が、自立した一人の社会人として働き生活して行く事に不安を抱くケースは決して珍しい事ではない。その大きな原因は、大学生(若者)と社会(特に地域社会)との「つながり」が希薄だからである。このような現象(社会問題)は、すでに戦後の高度成長期からわが国において続いて来た事である。しかし高度成長期から約半世紀を経て、若者が社会人として生きていく希望や気力が著しく低下している21世紀の日本において、それは放置できない状態となった。</p> <p>私たち高等教育機関の研究者は、若者の多くが、働く場(等身大の活躍の場)であるべき地域社会との「つながり」を構築できるようにするため、「地域学習の教育プログラム」を創出・普及させる必要があると考えている。</p> <p>実際に学校教育においては、小学校3・4年生の社会科で副読本を使った地域学習(市町村や県についての学習)を最後に、地域の歴史や地理など人文地理的な学習を科目として体系的に行う機会が設けられていないのが現状である。</p> <p>そこで私たちは、以下にしめす①～③の目的を達成するために、以下①～③のような研究を行った。</p> <p>① 若者(学生)が、栃木県を深く学び、栃木県に対する興味や関心を持つようになる教育プログラム(とちぎ学)のコンセプトを確立した。</p> <p>② 若者(学生)が、年長者とも「同県人意識」を持ってコミュニケーションできる能力を身につけられる教育プログラム(とちぎ学)のコンセプトをわかり易く説明する資料えお作成した。</p> <p>③ とちぎ学の意義や構想、及び授業テキスト例を報告書という形でまとめた。なお、配布にあたっては大学コンソーシアムとちぎの地域連携事業委員会において作成した「とちぎ学アンケート研究者リスト」を作成した。</p> <p>本研究によって創出された「とちぎ学」、つまり「高等教育機関における地域学教育プログラム」のコンセプトの最終的なアウトプットは、28ページの報告書にまとめた。その内容は以下の通りである。</p>

【とちぎ学 小冊子 内容目次 〈A4版 28ページ カラー〉】

1ページ	表紙
2～3ページ	1 はじめに —「とちぎ学」とは何か—
4～7ページ	2 「とちぎ学」の基盤と発展性について
8～10ページ	3 「とちぎ学」研究者リスト
11～16ページ	4 とちぎ学フォーラムミーティング 座談会の記録
17～25ページ	5 パイロット版テキスト試作 (付) テキスト執筆要領
26ページ	6 おわりに
28ページ	裏表紙 (奥付)

「とちぎ学」は、栃木県内を様々な角度から歴史軸をもって俯瞰する事によって、大学生（若者）が栃木県について学ぶという学習プログラムである。その目的は「栃木県の知識」をツールとして、学生が年長者との間のコミュニケーションを容易にするものである。したがって「とちぎ学」の特色は以下の①②に集約される。

- ① 大学生が「とちぎ学」で学んだ内容を、単なる知識として完結させるのではなく、地域社会での「コミュニケーションツール」として地域社会で活用する事、またそれができる能力を身につける事を学習の目的とする。ここに本研究事業の「独自性」がある。
- ② 地域学習（ここでいう「とちぎ学」の研究・学習の方法論は、単に栃木県内だけでのみ通用するのではなく、大学における学習プログラムらしく他の地域に移住しても、地域でのコミュニケーションを容易にする事ができる「普遍性」を持っている事もまた本研究の特色である。

4. 今後の課題及び発展性

今回の研究によって高等教育機関における教育プログラムとしての「とちぎ学」の基盤研究の第一歩を進める事が出来た。初期の構想を実現させ栃木県の大学のとくしよくある教育として発展させて行くためには、今後も研究やPR活動を行う必要がある。

今後の研究・PR活動については、その概略を示せば、以下の①～③の通りである。

- ① 「とちぎ学」のテキストと指導マニュアルの作成
大学コンソーシアムとちぎ加盟校の学生が受講可能な「とちぎ学」（地域学）のテキストと、指導マニュアル（教案や成績評価の方法等のマニュアル）の作成を行う。テキストは半期15回の講義を想定して約70ページとする。
- ② 「とちぎ学」テキストのパソコン上での表示方法の研究
「とちぎ学」テキストは、当初は冊子の形態で印刷を行うが、テキストで授業を行う場合、掲載データの更新という課題を避けて通る事はできない。テキストをデジタルデータ化してパソコン上でも表示できる方法を研究し、将来的にはインターネットを使ってテキストの配付やデータの更新ができるようにする。
- ③ 「とちぎ学」（地域学）フォーラムを開催し、「とちぎ学」の周知を図る。
「とちぎ学」（地域学）の研究メンバーに加えて、地域で活動する方々をゲストに迎え、コンソーシアム加盟校を会場にフォーラムを実施する。